



十河雅典の飽くなき探求は、ステップスギャラリーの個展において終息すること決してない。SONY、HONDA、TOYOTA など一流企業に対する辛辣な言及の根底に何が あるのかを探ることも不可欠である。そのためには、丁寧に、毎回出品されてくる作品と向け合わなければなるまい。今回十河が出品した作品の数を数えることが、私には出来ない。十河は旧作に加筆し、更に組み合わせで新作とする場合もあり、大型作品の何処までが一枚で、どれが独立した作品であるのかを考えることが不可能なのだ。すると離れていても一つの作品なのかも知れないと思ったりする。今回十河は入口、画廊内、事務所だけではなく、バルコニーにすらも作品を展示した。しかし全てが作品に埋もれ、息苦しくなることは決してない。寧ろ風通しが良く、5階の画廊を突き抜けて何処までも続く印象があった。

その理由は簡単である。今回の展覧会の最大のポイントは、画廊と事務所を繋ぐ扉が、画廊内からみると作品の一部として塞がれているにも関わらず、その作品は事務所から見ると《穴だらけの肖像》というキャプションが付けられているのだ。同じ作品でも、表裏で見ると違う作品になる。おまけに《穴だらけの肖像》と来た。私はこの「肖像」を「自画像」と勘違いした。《穴だらけの自画像》。正に十河の作品に相応しいではないか。攻撃する自らも穴だらけになる。それだけの決意を持って、十河は制作に取り組んでいる。自らの優位性などないのだ。

ここに空いている穴は、バルコニーの作品に反射されてまた中に視線が戻ることは決してない。十河の作品は、どこにでも存在するのだ。我々はこの十河の決意に気付かねばなるまい。我々もまた、自画像を描いているのだから。

